

10人
で
できること

家族や仲間と楽しみながらはじめるまちづくり

07 趣味から広がる 出会いの場、 海士人宿につどおう。

海士人宿とは50年ほど前まで海士町にあった、若者の寄り合い所のようなところ。そこでは、人が出会い、明日の海士を熱く語ったといいます。現在海士町は、UIターンで移住する人も増え、顔は知っているけど話はしたことはないという人が増えているようです。その原因のひとつに、ふらっと立ち寄っておしゃべりする場所や、みんなが盛り上げられる場所がないことがありました。



そこで、現代版海士人宿をつくりたいと考えています。場所は、島内にある使われなくなった保育園などの空き施設。キーワードは「趣味」です。空いている場所で、自分の趣味を活かして、島内の交流を生み出すという作戦です。例えば、サッカー好きが集まってのサッカー観戦会を計画したり、手芸が得意な人は、工房をつくって手芸教室を開いたり、料理上手が日替わりでカフェを運営してみたり……。予算をかけて新しい施設をつくるのではなく、あるもの(技)を持ち寄って、お年寄りから若者まで、誰もが楽しく過ごせる空間、それが海士人宿です。

まずは、みんなが使えるコピー機などの道具や設備を整える必要があるでしょう。そんな場所づくりから、多くの仲間に出会い、海士で暮らす楽しみが広がっていくように思います。こんなことしたい、あんなことしたいを持ち寄って、海士人宿を一緒につくりましょう。



参考文献

『コモンカフェー人と人が出会う場のつくりかた』 山納 洋 著 (西日本出版社刊)

参考事例

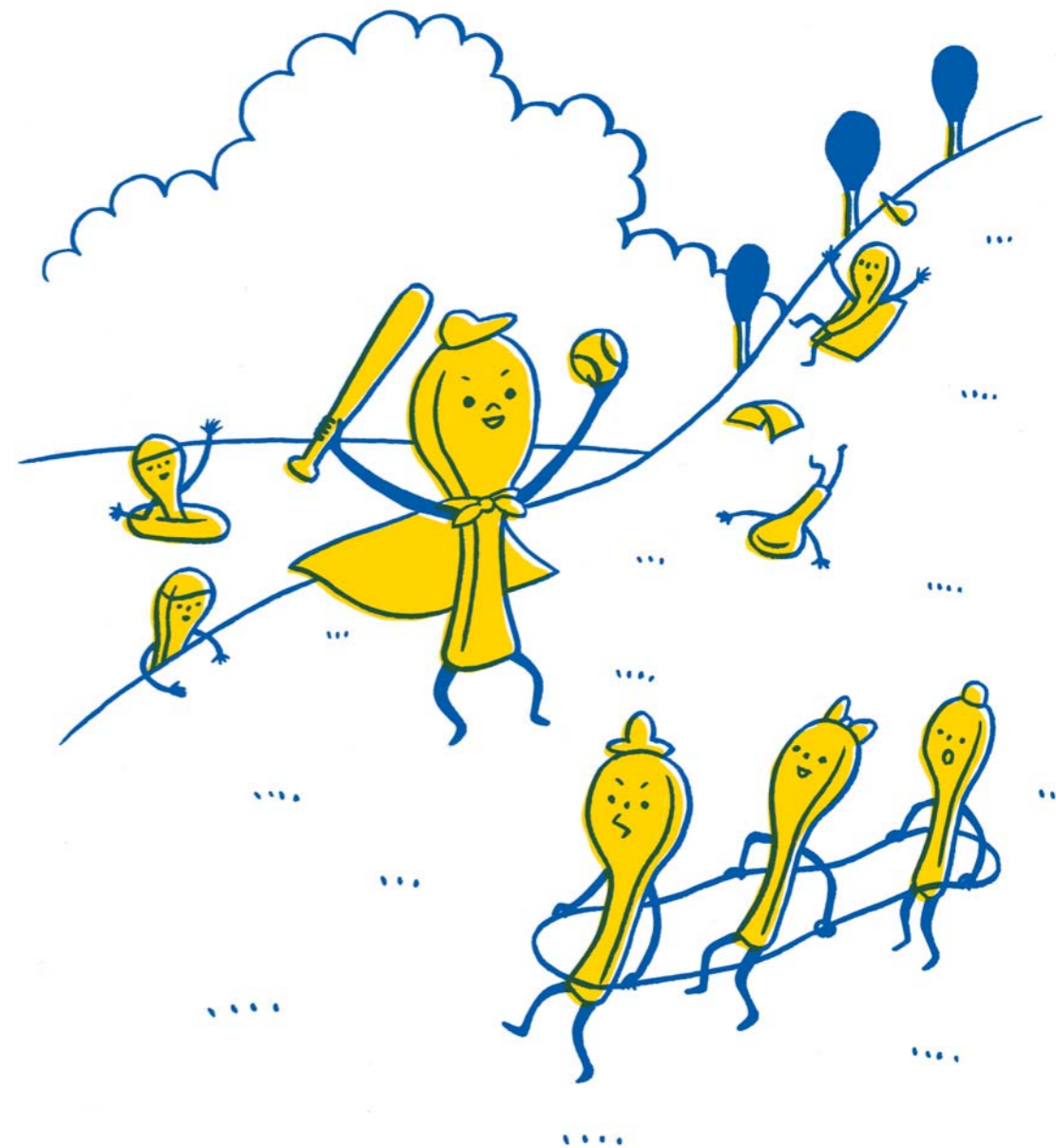
ひがしまち街角広場 (大阪府千里ニュータウン)
コモンカフェ (大阪府北区中崎町)

08 海を山をかけめぐれ！ 未来のリーダー、 ガキ大将を育てよう。

かつて島には、海や山で元気に遊ぶたくさんの子どもたちがいました。汗だく、泥だらけになって、時間も忘れて遊んだ懐かしい記憶を持つ大人も多いことでしょう。しかし、今の海士町は、子どもの数も少なく、テレビゲームなどで家で遊ぶ道具が増えたこともあって、外で体を使って遊ぶ機会が減っています。こうした生活習慣は、子どもの体力や運動能力にすでに現れており、2008年に文部科学省が行った「体力・運動能力調査」でも、すべてのテスト項目において、子どもの親世代の数値を下回っているという結果がでています。体力不足は、単に体育の授業や部活、スポーツに影響するだけではありません。勉強を持続したり、健康を保ったりするなど、高校生、大学生、大人になってからの生活に大きく影響する可能性があります。

また、集団で遊ぶことで学ぶこともたくさんあります。仲間をまとめ引っ張るリーダーシップ、年少者や弱いものへのいたわりのところ、新しい遊びをつくり出す創造性など、まさに私たちがまちづくりをするにあたって必要としている要素ばかりです。

そこで、子どもたちが島の子らしく遊べるきっかけとして、元ガキ大将たちが中心になって「海士遊び大会」を企画したいと考えています。丈夫な体をつくり、仲間をつくり、そして将来海士町を担うリーダーを育む。ガキ大将づくりを応援してください。



1人でできること

10人でできること

100人でできること

1000人でできること

参考文献

『いろり火』 海士町郷土誌。海士町開発センターにあります。

09

あまおんな

海士女の知恵と技。 あまさん倶楽部で 特産品をつくろう。



あまおんな

海士女の、海士女による、海士女のための寄り合いクラブの提案です。その名も「あまさん倶楽部」。あまさんとは、海土産、海女さん、尼さんの3つの意味をかけたもの。海士に住む女性が、海土産の特産品づくりに挑戦しようという取り組みです。

あまさん倶楽部の特産品は、期間限定・数量限定の加工品。お総菜や漬け物、ジャム、干物などを考えています。島の特産品である魚介類や野菜・果物などの生鮮品は、収穫量に波があり、時に過剰に採れすぎて、廃棄せざるを得ないという問題があります。そうした食材を加工することで、日持ちする商品にしたり、消費しやすい商品にすることができ、廃棄を減らし、島内での地産地消を促すことができるのです。

さらに、あまさん倶楽部のもうひとつの特徴は、「セカンドホーム」の機能を持つこと。これは、加工品の仕事に参加するメンバーで、一人暮らしをしている女性(=尼さん)を対象に、「第2の我が家」としてあまさん倶楽部を運営しようという試みです。一人暮らしが心細いとき、台風や嵐のときなど仲間と一緒にいたいときに「帰れる家」として倶楽部の施設が活用されます。

女性が何歳になってもイキイキと輝ける島、海士。あまさん倶楽部は、やりがいのある仕事と和む居場所の提供、そして島の地産地消への貢献を目指します。

参考事例

弓削女性塾（愛媛県上島町）

1人でできること

10人でできること

100人でできること

1000人でできること

10 グリーン・ツーリズムの発展版！ 体験交流を産業にしよう。 海士ワーキングホリデー事業。

最近、グリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムと呼ばれる、新しい観光のかたちが注目されています。それは、農業や漁業など、田舎ならではの仕事体験を通じて、地元の人との交流や自然体験を楽しむ観光のこと。すでに海士町でも、アグリベンチャーツアーやママのがっこうなど、さまざまな体験プログラムが実施されてきました。

今回は、この体験交流観光をさらに発展させ、1ヶ月から1年という長期間、



海士に滞在してもらおうという提案です。いわば、海士への「ワーキングホリデー」。仕事をし、給料をもらいながら、島の暮らしを楽しんでもらうのです。

海士の産業である一次産業は、忙しいときとそうでないときの差が激しく、繁忙期は人手が足りず、特に若い働き手が圧倒的に足りていません。そんな季節によって変動する島の仕事を事務局が一括管理。一年を通していつ海士に来て、仕事をしてもらえる体制を整えておくものです。例えば、春はいわがき出荷作業、夏は民宿や農業、秋は稲刈り、冬はなまこ漁など、海士らしい体験を提供します。島外の人とふれあうことは、島の住民にとっても貴重な体験になります。都会の視点やパソコンなどの技術は、新たな商品開発や販売のアイデアにもなるはず。

基本は島外の出郷者や若者向けに考えていますが、島内で仕事を探している人の仕事体験としても活用できます。



用語解説

ワーキングホリデー…海外で、仕事をしながら休日を楽しむ制度。通常は、海外で仕事をするの許されない観光ビザでも、他国の理解を深めるために特別に許可するもの。

11 移動販売と はかり売りの店、 ワゴンショップ海士号。



急速に高齢化と人口減少が進んでいる海士町では、買う人の状況も昔とずいぶん変わってきました。高齢化と核家族化で、お年寄りの単身もしくは、2人暮らしという家庭が増加。人口が減ることで商店も減少、店のない地域もあります。家の近くに商店がない人や移動手段を持たない人にとって、買い物は困ったことのひとつになっています。こうした状況は「まちの問題」としてとらえられがちですが、実はこの「困った」こそ、新しいチャンスを生むのです。

買い手のニーズを考えてみると、近くにお店がほしい、1人または2人家族が使いきれぬ量で売ってほしい、海士町産のものがほしい、お店でおしゃべりや情報交換がしたいなどがあげられます。そこで、そんなニーズにこたえるために移動販売の店「ワゴンショップ海士号」を走らせてみませんか？ワゴン自動車に商品をつんで島の集落をまわり、食料品や日用品を販売するお店です。野菜は少量でも販売できるはかり売りを導入。あまさん倶楽部(⇒p44)などと連携して、島の特産品を買えるようにするのもいいかもしれません。青空市場風にお店を広げれば、集いの場にもなります。すでに、「ひまわり」や「海士人の出張ビアガーデン」「つむぎや」のおばちゃんなど移動販売の先輩もいます。先人の経験を参考に、誰もが買い物を楽しめるまちを目指しましょう。

?用語解説

ワゴン自動車…箱型でうしろに荷物が積めるタイプの車。
ニーズ……………必要としていること、要望。

12 安全・安心の 地域づくりのかけ橋。 おさそい屋さんになろう。

「顔は知っているけど、あんまり話をしたことは……」。そんなご近所さんいませんか？今、海士町で心配されていることのひとつに、海士町の近所づきあいが薄くなってきているのでは？ということがあげられます。近所づきあいがなくなるということは、いざ災害が起きたときや家で困ったことが起きたときに、いちばん身近にいる人に助けを求められない、そんな状況を生み出す可能性があるということです。これでは安全・安心なまちとはいえないのではないのでしょうか。

そこで、地域交流を盛り上げるために、新たな地域ネットワークをつくりたいと思います。名づけて「おさそい屋さん」ネットワーク。これは、海士の人の「さそわれたら動く」という島気質から考えられたもので、住民に声をかけて、地域の活動にさそうボランティア「おさそい屋さん」をそれぞれの地域に育てていこうというものです。

幸いにも海士町には地域づくりを勉強した人や地域に関わる人が大好きな人がたくさんいます。こうした人を中心に「海士町の地域を考える会」を同時に設立し、「おさそい屋さん」とともに、どんな交流会を開いたらいいのか、どうやって「おさそい」すればいいのかなど、一緒に考えていきます。「おさそい屋さん」が町の津々浦々にいることで、それぞれの地域の問題をみんなで一緒に考えることができます。お年寄りも、共働きの家庭も、1人暮らしも、みんな安心して暮らせる海士町。これが「おさそい屋さん」の目標です。

参考文献

『多井の人がもっと幸せになる25の方法』 海士町社会福祉協議会発行



1人でできること

10人でできること

100人でできること

1000人でできること

福祉は「お世話すること」なのだろうか？ 都会の学生が「多井」に住んで、 気づいた福祉の意味。

ここに『多井の人がもっと幸せになる25の方法』という本がある。これは、2008年の夏に多井地区に一月滞在した、岡山県倉敷市にある福祉系大学の2人の学生によってまとめられたものである。多井地区の世帯数は15世帯。日中の高齢化率は90%にもなり、一軒の商店もないという、まさに「限界集落」地域。そこに、学生たちは高齢者福祉を学ぶためにやってきたのだ。

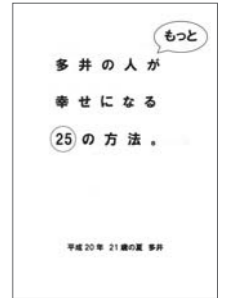
「当初、学生たちは地域住民の『お世話をしたい』という気持ちで、入っていったんだと思います」

そう語るのは、学生たちと多井地区のパイプ役を担った、社会福祉協議会事務局長の片桐一彦さんだ。片桐さんは、学生たちに一月間、公民館で暮らしてみることを提案する。

「多井地区は、何もなくていいところ。コンビニもない、インターネットもない、自動販売機もない(笑)。そんなところでは、彼らは、お世話する側ではなく、される側になってしまったんです」

家電のない公民館暮らし。そんな中、地域住民が洗濯機を学生に提供してくれたのだが、その洗濯機は昔懐かしい二槽式。若い学生たちには見たこともない代物ゆえ、使い方も教えてもらわなくてはいけなかった。また、多井地区には商店がないため、学生たちは菜園で育てた野菜やお惣菜を分けもらい、タコをもらえば「タコのさばき方を教えてください」と住民に呼びかけ、助けてもらったという。

「何もできない学生たちが入っていくことで、多井地区の人たちの心には『支えたい』という気持ちが湧き上がってきたのだと思います。そして、そこに生



『多井の人がもっと幸せになる25の方法』

まれる『ありがとう』という言葉。これは、下手すれば一日中だれとも会話をしない高齢者たちにとって、すごく意味のあったことだったのではないのでしょうか」

とかく福祉とは、社会的弱者を「お世話する」ことや「ボランティア」のようなものだと思われている。しかし、これを見れば、多井地区のお年寄りたちが「支援の必要なかわいそうな人たち」ではないことがわかるだろう。

「お世話という意識を超えたところにこそ、私たちが目指す福祉があるのではないかと思っています。福祉を広辞苑で引いてみてください。その意味は『幸福』だと書かれています。多井地区の人たちは今、不幸でしょうか。いや、もともと『幸福』なのではないかと思うのです。私たちができることは、今よりももう少し幸せを感じてもらえるようにすること。それは、今回の学生との交流のように、笑顔を増やすことなんだと思います」

「不幸への転落は、孤独から始まる」。そう片桐さんは言う。だからこそ、「お世話」という意識ではなく、ともに笑いあえる機会を考えることが大切なのだ。

今年の夏、また学生たちは「お世話をされに」海士にやってくるという。「みなさん、お茶会をやりましょう。公民館にあつまってください〜い」という地区放送に、いそいそとお茶うけの漬物を持って、おじいちゃん、おばあちゃんが集まってくる姿が目につく。「あの子たちは、お茶しか用意してないからな〜」といいながら。そこに、ニコニコとした笑顔が浮んでいたら、それこそ「幸福」が生まれたあかしになるだろう。❶